

再びトイレでの 排泄を目指して

～想いに寄り添うことでみえたこと～

平成29年11月10日

介護老人保健施設 そよかぜ倶楽部

介護福祉士 丸山 素子

2階従来型介護職員一同

はじめに

長期入院に伴いADL低下となった利用者様に対し
他職種が連携し、精神的・身体的サポートを行い
その向上に至った取り組みを報告する。

<対象者>

T様 61歳 女性 要介護度：4

日常生活自立度：C 1 認知症自立度：正常

既往歴：先天性白蓋形成不全

糖尿病（10年前）

慢性肝臓病（H27）

左下肢褥瘡術後（H28.12）

入所時：歩行困難・オムツ適宜対応

<性格>

気さくで明るく 社交的（話好き） 遠慮深い

<習慣・好み>

お洒落 化粧 読書 数独 猫好き

《入所からトイレ誘導導入までの支援経過》

平成28年 5月 (入所当時) ①ベット⇔車椅子 二人介助

平成28年 7月 ②スライディングボード使用 1人介助

平成28年11月 ③腰支え1人介助

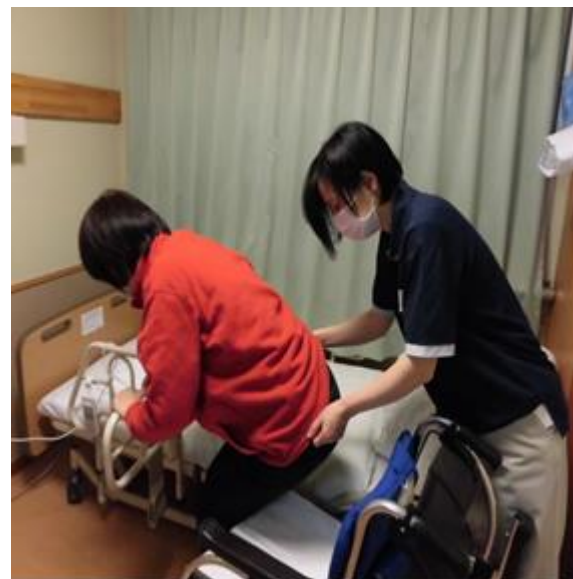
【①】



【②】



【③】



平成28年12月 日常的リハビリの成果により

「以前のようにトイレで排泄がしたい」

「ゆくゆくは自宅に戻りたい」



《トイレ誘導導入に向けて》

- ① P T ・ 介護職員とのトイレでの動作確認 ・ 介助方法の共有
- ② 「専用ノート」でスタッフ間の情報共有を図る

平成29年2月

④腰支え1人介助⇒見守りのみへ

【④】



日常的なトイレ誘導 ⇒ *毎朝食後の排便
*車椅子自操・活動量増

「今日もトイレでお通じあったのよ」

平成29年3月

「歩行器を使ってみたい」

「次の目標は何にしようかしら」

からだの向上

とともに

こころの動きへ

< 考察・まとめ >

T様の性格や精神面・身体状態を考慮しながら、その時その時の状況に合わせて他職種で関わり、目標を少しずつステップアップし日常生活の中で生活動作に取り入れていけたことがT様の「トイレに行きたい」という希望を無理なく実現することにつながったのではと考える。

自分でできることが少しずつ増えていく喜びは、T様の自信につながり、新たな目標・意欲を生むことにつながったと考える。

<おわりに>

「助けるだけの介護」から「よくする介護」へ

利用者様の想いに寄り添いながら一步一步確実に進めていったことで、不可能だと思っていたトイレ誘導を可能にすることができた。

T様の本当にうれしそうに話す姿・言葉や笑顔を見ることで私達も同じ喜びを共有することができたことは、かけがえのない経験となった。これからもチーム一丸となって利用者様の想いに寄り添う介護をめざしていきたいと思う。